

Title	落合昌太郎 社会生活学
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.12 (1920. 12) ,p.1800(150)- 1802(152)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19201201-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この書を以て、近來の貴重なる文獻の翻刻であると云ふことが出来と思ふ。(加田忠臣)

落合昌太郎著 社會生活學

平安堂書店發行
定價壹圓五拾錢

目慣れぬ標題であるが内容は經濟理論である。現在の經濟學に不満を感じ、在來の因襲を脱して「經濟學を科學として完成することを期して」書いたものだと著者は序文の中に云つて居る。全篇三百三十二字二百六頁のものであるから量に於ては小冊子に過ぎないが、癖といつて見ると在來經濟學書の讀者には決して讀易い本ではない。それは著者が殆ど全く在來の系統術語を踏襲しないで、全然新たに一の學問の結構を試みようとして居るからである。恐らく價值と價格の二語を除くの外、著者は從來の經濟學用語を一つも採用してないと云つてよからう。本

書の長所も短所も無論此點にあるべき筈である。

限られた紙數内で讀者に會得の出来るやうに本書の内容を紹介するのは困難であるが、先づ其一端を記すと、抑も生活の目的は一飽滿、二安寧、三愉樂であるが、原始時代を脱すると「時世の變遷と共に生活の實質に種別を生ずるに至る」。一は直接的な生活、二は間接的な生活である。而して衣服を着る爲めに裁縫するのは直接生活で、他人の衣服を裁縫し其報酬によつて衣食せんとするは間接生活であると云ふに徴すると、直接間接生活の分岐は所謂交易經濟の成立によつて生ずるものと見て好いらしい。然るに間接生活を營むと云ふことは本來己れの欲するもの得んが爲め的手段として或他のもの(物か廣義の勞力か)を提供するに外ならぬから、間接生活に對する能力は著者の所謂供給能力であ

る。之に對して直接的な生活に對する能力を需要能力と云ふ。併し落合氏の所謂需要能力は經濟學で云ふ購買力を伴ふ要求の意味ではなくて單なる享受(Geniesse)力を意味して居るらしい。さて右兩様の生活の對象となるものを名づけて資財と云ふ。茲に謂ふ資財の中には普通經濟學で云ふ財は含まれては居るが、それよりも遙かに範圍の廣いものである事は論を俟たない。その次に來るのが攝用である。攝用は、從來の術語を強いて之れに宛てはめれば經濟行為であるが、其範圍は遙かに廣い。著者に從へば「生活能力の表現、若しくは實行を攝用と名付く、生活人格者が其生活能力に依て或る對象に接觸する場合を云ふ」のである。この攝用に三種ある。一、資財を消費する攝用、二、資本を使用する攝用、三、資財を變化する攝用であるが、説明を讀んで見ると三は從來の生産、一と二は廣義の

消費に歸着するものらしい。さて生活能力の表現が攝用であるから、攝用にも需要攝用と供給攝用とがあるのは當然である。斯うして價值の問題に近づいて行く道筋はよく分る。不幸にして價值其者の説明は未だ評者によく會得されないが、「資財の生活的算定」であるところの價值を分つて需要攝用に於ける價值と、供給攝用に於ける價值との二にして居るのは demand price と supply price との別と相通するところがあるやうに思ふ。而して「攝用が實行さるゝ場合の資財の價值……需要攝用者の主觀的價值と供給攝用者の主觀的價值 (g.o.) とが一致したる算定を」價格と云ふ。「價格の基準」なる一章は從來の言葉で云へば價值尺度を論じたものらしい。茲で普通不熟練勞働者の生活費(即ち收入)を以て價值の尺度とすべしと云ふらしい議論が發展しかつたと思ふ間もなく中止されて居るのは

惜むべきである。

著者は全然参考書を見ずして此書を書いたと云つて居るが、参考書を見ないのが骨を惜んだのでなくて却て易さを避けたのだと云ふことは充分評者にも首肯される。斯う云ふ勞多くして効少なかるべき書が賣文の爲めに書かれるものではない。時としては定義の不精確、説明の不充分と及び稍多くの獨斷とあるにも拘らず、評者は此理論結構の試みを興味を以て一讀した。著者が更に此方面の思索を續けて、其の努力の結果を大成せられん事を切望するものである。

(小泉信三)

附 録

理財學會記事

秋季理財學會大會

十一月五日午後一時半より大ホールに於て開催せり。講演者及題名は左の如し。

一、開會之辭

野村兼太郎氏

一、支那に於ける文化運動と憲法上の規定

及川 恒忠氏

一、ロツチテール、バイオニアの話

氣賀 勘重氏

一、労働運動の深刻化と新社會秩序の建設

北澤新次郎氏

閉會後六時より萬來舎にて晚餐會を開く。次の諸氏の出席あり。

氣賀 勘重氏

阿部 秀助氏

増井 幸雄氏

清水 静文氏

松野 喜内氏

野村兼太郎氏

園 乾治氏

三年幹事 里見、金原

二年幹事 津田、石塚、吉岡、小栗、平尾

一年幹事 稻上、中島、小堀、岩崎、黒川、柳、西村、小田川

前號(第十四卷) 目次(大正九年十一月號)

論 說

◎限界效用説雜考

三邊 金藏

◎ロオドベルトの地代論と

リカルドオ(二、完)

小泉 信三

◎續契約解除論(四)

神戸寅次郎

◎株式會社發起人論(三)

西本辰之助

◎フイヒテの經濟觀(中)

阿部 秀助

◎上海兩と上海の通貨

池田 龍藏

◎社會保險の資銀に及ぼす影響(上)

園 乾治

◎消費經濟論

奥井復太郎

◎歐米經濟史界の趨勢と其の研究法(下)

木村 莊五

◎高橋誠一郎著「經濟學史研究」

小泉 信三

◎小泉信三著「經濟學說と社會思想」

阿部 秀助

◎手塚壽郎著「ゴッセン研究」

小泉 信三

一冊定價金五拾錢 郵税金壹錢五厘
半年分金貳圓九拾錢 郵 稅 共
一年分金五圓四拾錢

編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛

營業に關する用件は發賣元宛

原稿締切期日は發行の前月十日限

大正九年十一月卅日印刷納本 每月一回一日發行

大正九年十二月一日發行

三田學會雜誌 第四十卷 第二十二號
編輯者 江田 範 保
發行所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
印刷者 金子 鐵 五 郎
印刷所 金子 活 版 所

發賣元 株式會社 東京堂書店

尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所 東京芝三田 慶應義塾内 理財學會